

雪中富士登山記

小島烏水

青空文庫

今朝は寒いと思うとき、わが家の背後なる山王台に立って、遙かに西の方を見渡すと、昨夜の風が砥ぎ澄まして行つた、碧く冴えた虚空の下には、丹沢山脈の大山一帯が、平屋根の家並のよう
に、びったり凍かんで一と塊に押しつけられている。その背後から陶器の盃でも伏せたように、透き徹っているのは、言うまでもなく富士の山だ。思いがけなく頭の上が、二、三寸ほど、大根卸しでも注いだように、白くなっている。山の新雪！ 下界では未だ霜が結んだという噂も聞かないのに、天上の高寒に、早くも洗

礼を受けて、甦ぞつったように新しくなった山を見ると、水を浴びせられたように慄ぞつとなる。

三日四日と経つうちに、山の頭は喰い欠かれたように、うす霞に融けて見えることもあるが、白さは次第に劃かつきり然と、碧い空から抜け出るようになり、山の肌はいよいよ光輝を帯びて来る。冬が来た、冬が来た、木はその葉を振り、飛ぶ禽とりも翼を縮めるべき冬が来たのだ。その冬の先駆なる高嶺の雪！

自然は富士山という一つの題材を、幾千百部に切り刻んで、相模野からかけて、武蔵野辺に住む人たちに朝となく、夕となく、種々の相を示してくれる。その中にも山頂に落ちた白雪は、私の神経を刺戟することにおいて、幾百反歩の雑木林の動揺と、叫喚

とも、勝っている。

その新雪光る富士山の巔いただきを、私が踏んだのは、去さる四十年十月の末であつた。

二

「十月二十六日夜九時、御殿場富士屋へ着、寒暖計五十六度、曇天、温に過ぐ、明日の天候を氣遣うこと甚だし。」
と日記に書いてある。

頼んで置いたので、翌くる朝午前二時に起してくれたが、大裾野は鼻を摘まれても解らないほど、闇黒がどこまでも拡がついて

るので、少なからず頭を悩ました。しかし案内の剛力（名を勝又琴次郎という）が、今まで幾回も登山したが、頂上へ登らずに、下山したのは、ただの一度しかない。「山運の好い男」を誇っているのが、何だか便りのようにも思われて、私と弟とは、その男に先導されて、闇の中を、行けるところまで行くことにした。

焼砂が足の指先に、ザクザク障るので、闇の中でも裾野を歩くという意識があるだけだ。町外れから、曲り拗くねった路や、立木の暗い下を迂路うろついて、与平治茶屋まで来た。ここで水を飲もうとすると、犬が盛に吠える、「誰だあ、やい」戸の中から寝ぼけ声が聞える。勝又が名を言うと「山けえ」と老人らしい声がしたがそのまま寂ひツそりとする。「御馳走さまで」と、案内者は水の

礼を述べて、いよいよ裾野の中へ入る。

白い吹雪が大原の中を、点々と飛ぶ、大きく畝うねる波系が、白くざわざわと、金剛杖に搔き分けられて、裾に靡く、吹雪は野菊の花で、波系は芒すすきの穂である。悪い雲が低く傾いて、その欠け間から月を見せる、立木の腹が、夜光の菌でもあるように、ブーツと白く明るくなつた。

知らぬ間に、爪先上りとなつて、馬返しまで着くと思いがけなく村の男女が、四人ばかり籠をしょつて、こつちを見ている。禁制の官林に潜り込んで、何か内密の稼うぎをするらしい。知つてる顔と見えて、案内者は薄明りに、二言三言挨拶をして行き過ぎる。

明け行く夜は、暁天の色を、足柄山脈の矢倉岳に見せて、赤あかと

蜻蛉んぼのような雲が、一筋二筋たなびく、野面けむりは烟けむりっぽく白くなつて、上へ行くほど藍がかかる、近処の黄木紅葉が、火でも点ともされたようにパツと明るくなる、足許の黒い砂には、今まで見えなかつた櫓の落葉や、松の繋ぎ葉などが、シツトリと舐なめられたように粘ツついている。朝日を反映さする金茶色の唐松と、輝やく紅葉——そのくせ、もう枯れ枯れに萎しなび返つて、葉の尖さきはインキを注さしたように、黒くなつて、縮れている——で、夏ならば緑一色のちよんぼりした林が、今朝は二、三倍も広くなつたような気がする。曙の色は林の中まで追いついて、木膠や蔦の紅葉の一枚一枚に透き徹る明る味を潮さして、朝の空気は、醒めるように凜りん烈れつとなつた。

中の茶屋へ着くと、松虫草の紫は、見る影もなく褪せているが、鳥胄草は濃紫に咲いている、そして金屏風を背後にした菊花のよ
うに、この有毒植物の、刺戟強い濃紫は、焼砂の大壁を背景にし
て、荒廃の中に、一点の情火を、執念しつこくも亡ぼさずにいる。

太郎坊へ着いて見ると、戸は嚴重に釘づけにされ、その上に材
木を筋交えに抑えにして、鋼線で結びつけてあるが、寂ひツそりと
して、人の気はなく、案内者の咳払いが、沈んだ空気を乱しただ
けだ。

東方を顧れば、箱根足柄にかぶさる雲から、雨脚のような光線
が流れて、大裾野は扇の地紙のように、森や小阜しょうぶの折目を正し
くして、黄色に展開している。朝の霧が、方々から烟のように這は

ついているほど、快晴であるが、一合目辺をカツキリ境界線にして、頭上の富士山は、雲のためにまるで見えず、天上の空次第に低く垂れて、屋根の上を距ること僅わずかに三尺。

私は山を包む濃雲に絶望しながらも、屋根へ這い上って、虚空を見ていると、眼の前を灰色の霧は、渦巻いて、髯ひげを伝わる呼吸が、雫となつてポタポタ落ちる、鉛筆をポケットから出して、弟が寒暖計を見て報告する温度を、手帖に記していると、傍から鉛筆の墨が滲にじんで、文字が紙の上で解体するほどの霧だ。

眼の前には粒の細かい黒砂が、緩なだらかな傾斜となつて、霧の中へ、するすると登つている、登山客の脱ぎ捨てた古草鞋ふるわらしが、枯ツ葉のように点を打つて、おのずと登り路の葉しおりとなつている、路傍の富士薊ふじあざみの花は、獣にでも喰い取られたらしく、剛々しい茎の頭に、半分残つて、根はシツカリと、土から離れまいと、しがみついて慄えている。太郎坊附近の、黄紅朱樺の疎らな短木の中を、霧は幾筋にもなつて、組んず、ほぐれつして、その尖端が愛あしたか鷹山したかの方向へと流れて行く、振り返れば、箱根火山彙かざんいには、雲が低く垂れて、乙女峠から金時山の腰へかけて、大河の逆流するばかり、山と山との間は、幾つにも朝雲が屯たむろして、支流が虚空の方々に出来る。

そのうちに、愛鷹山は洗われたような瑠璃色るりになって現われる。雲は東から西へと引いたように取れると一天は石灰洞のような大口を開けて、見る見るうちに次第にひろがり、碧い初冬の冴え返った空が、冷たい鯖色をした湖水のようになって、金光ちらりと黒砂に燃え落ちる、黒砂の一線、天に向つて走るところ、頂上火口の赭あかは禿はげた土は、火を翳かぎしたように眩まばゆるくなる。

西風が強いかして、傾斜の土に疎ら生えている、丈の短い唐松や、富士薊あざみが、東に向いて俯うつむ向きに手を突ついている。紅葉の秋木も、一合五勺位から皆無になつたが、虎いたどり杖は二つ塚側火山の側面まで生えている、それも乱れ髪のように、蓬々としている。

二合目で、今まで気が注つかなかつた山中湖が、半分ほど見えて

来た、室は無論人はいないが、それでも明けツ放しになっている。なお登ると、二合二勺の室には水まで汲み込んだ樽が置いてあり、かまど竈の側には、薪が三把ほど転がっている、防寒具を整えて来なかつたが、これで焚火たきびに事欠かないと解つて、仮令たとい天候が悪くつても、泊る宿があるという気強さが、頓にわかに胸に溢れて来る。

もう山を浸していた霧も、気温のために、方々から湯気のように蒸騰して、砂の息蒸いきれの匂いが何処からともなくする、二合五勺に辿り着いた頃には、近くは勾まがたま玉状に光れる山中湖と、その湖畔の村落と、遠くは函根足柄を越えて、大磯平塚の海岸、江の島まで見えた。

三合四合と登るほどに、黒砂は凝結したように、ポロポロと硬

くなつて、時に生れどころの解らない大霧が、斜面を這つて、煙のように舞い立つこともあつたが、五合へ来たときには、それも拭うように晴れて、北風が起り初めた、鳶が一羽、虚空に丸く輪を描いて山体の半分を悠揚と匝ぐつて、黒い点となつて、遙かに消え失せた。

頂上を仰ぐと、平ツたい赭渋色の岩の上に、黒く焦げた岩が、平板状に縞を作つた火口壁が、手の達くほど近く見え、鉛のように胸壁に落ちてゐる雪は、銀の顫くように白く光つて、叩けばカアンと音がしそうだ、空はもう純粹なるアルプス藍色となつて、海水のように深秘に静まり返つてゐる、仰いだ眼を土に落すと、岩も雪も、この色に透徹して、夏には見られない。冴え冴えと鋭

い紫がかつた色調が、凸半球の大きに流動している。

六合目——宝永の新火口壁（いわゆる宝永山）まで来ると、さすがに高嶺の冬だと思われる冷たさが手足の爪先まで沁みて来る。これから上の室という室は、戸を嚴重に密閉して、その屋上には、強風に吹き飛ばされぬ用心に、大塊の熔岩ラヴァが積み重ねられ、怖るべき冬ゼネラル・ウィンター将軍の来襲に備えられている、下界はと見れば、大裾野の松林は、黒くして虫の這う如く、虎杖や富士薊は、赭黄の一色に、飴のようになって流れている、凡すべてが燻いぶされたようで、白昼の黄昏に、気が遠くなるばかりである。

六合五勺にして、頬は皮膚病患者のように黄色になった、弟はと見れば、唇は茄子のように、うす紫になっている。案内者のも

同じだ、私のもそうだという。なお一合ばかり登ると、変幻極まらない雲が、また出た、しかも夏雲のように、重々しく平板状に横よこたわらないで、垂直に高く突つ立ち上り、我が大火山の赤壁と、両々対立していたが、やがてこの灰色の浮動する壁は、海洋からの温暖なる軟風に吹かれて、斜に推し倒され蝕むしくつたように穴を生じて、その穴の底の方から、岩燕の啼く音が聞えた。

初めて雪に触れたのは、七、八合目の間であつた、殊に八合目の室だけは、どういうものか、半ば戸が開いて、中の水桶には厚氷が張り詰めている、誰かが捨てて行つた手拭は、板のように硬くシヤチ張はっている。

一同は杖に倚よつて、水涸れの富士川を瞰みおろ下しながら、しばらく

息を吐く。

四

雪の厚さは二寸か三寸ばかり、屏風が浦という、硬い熔岩ラヴァの褶折が、骨高に自然の防風牆しやうとなつてゐる陰には、風に吹き落されたものか、雪が最も多くて、峽流のように麓へ向つて放射している、その重味で、黒沙の土が剝えぐられたように凹んでゐる、黒沙を穿つと、その下にも結晶した白いのが、燦きらりと光る、山体が小さく尖つて来るほど、風が付き添つて攀じ上り、疾はやく吹きなぐるので、熔岩を楯に身をすぼめ、味も汁気もない握り飯を喰べて、

腹を拵える。

九合目に来た、もう一杯の雪で、コンクリートで堅めたように凍っているから、鳶口でもなければ、普通の金剛杖では、立ちそうにもない、胸突八丁、大ダルミなどは、大分息苦しく、殊に足の^{すべ}まり方が烈しかったが、それでも思いの外に、^{ひる}怯まずに登りついた。

駒ヶ岳から浅間祠前は、雪が凝^こつて、鱗のように、あるいは貝殻を刻んだように、皺が寄っている、一尺位は深いところで積っているかも知れないが、杖が立たないから、測ることも出来ず、また実はそういう、余裕も、寒さのためになかったので、直ぐに鉄の頸輪のように、噴火口を^{めぐ}繞れる熔岩塊の最高点、剣ヶ峰――

海拔三七七八米メートル突まで登り切ると、北風は虚空の中を棒を振るようにヒユヒユ呻り声を立て、顔や手足の嫌きらいなくチクチク刺す。初冬の山と幾分か軽く視て、雪中の登山服装というほどの準備もしていなかったため、幾重の衣も徹されて、腹から股にかけ、薊あざで撫で廻されるような疼痛を感じ初めた、唇はピリツとして、亀裂するかと惑われ、その寒さにわなわなと骨髓から震動した。

足許を瞰みおろ下すと、火口壁の周辺からは、蠟燭の融けてまた凝つたような氷柱つららが、組紐の如く、何本となく、尖端を鋭くして、舌のように垂れている、火口底は割合に、雪が多くない。振り返れば外輪山から山腹までの大絶壁は、葡萄色えびに赭あかツちやけて、もう心もち西へ廻った日光が、斜にその上を漂っている、西の方遙か

に白峰しらつね、赤石、駒ヶ岳、さては飛驒山脈が、プラチナの大鎖を空間に繋いだように、蜿蜒えんえんとして、北溟ほくめいの雲に没している、眼を落とすと、わが山麓には、富士八湖の一なる本栖湖もとすが、森の眼球のように、落ち窪んで小さく光っている。

来年こ年の夏の炎熱が、あの日本北アルプスの縛いましめの、白い鎖を寸断して、自由に解放するまで、この山も、石は転び次第、雲は飛び放題、風は吹き荒すさぶなりに任せて、自然はその独創ルインの廃址ルインを作りながら、かつこれを保護しているであろう、今という今「古い家」を塗り潰した「新しい家」の屋上に立って、麻痺した私の神経は、急に幾倍の鋭さを加え、杖を力に延び上って、日本アルプス大山系を手招きして小躍りした。

「寒いも寒い、見晴しも大したもんだ……」と私の方へ顔を向けて、「山運の好い男」が言った。

しかし、その語尾は勁風に吹き飛ばされてしまった。

青空文庫情報

底本：「山岳紀行文集 日本アルプス」岩波文庫、岩波書店

1992（平成4）年7月16日第1版発行

1994（平成6）年5月16日第5刷発行

底本の親本：「小島烏水全集 全十四巻」大修館書店

1979（昭和54）年9月～1987（昭和62）年9月

入力：大野晋

校正：地田尚

1999年9月20日公開

2003年10月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪中富士登山記

小島烏水

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>